『竹斎』再論（その九）

田中　宏

（九）

107【写本】扨みなミにたち出て　三保の松原うちなかめ　しほ汲ためか田子のうら　なミよりうへのうきしまを　見れハこゝろもきよ見かせき　懸るうき身はよもとかめしとて　こしをれそつらねけり

はる〳〵と　爰にきよ見かせき守も

かゝるうき身ハ　さしてとかめし

にらミの助も一首申さんとて

しうとのと　我につきそふひんほう神

こゝにきよみかせきをゆるすな

かくて、せいけんしに参りつゝ、ミたうのあたりをミわたせハ前には、かいすいまん〳〵として　へんしうにさほをさし　つりのいとなみひまもなし　後にハ、れいけんの山たかふして　はんほくこすへをならへ　たにの水音、入あひのかねに至迄　誠にしよほうしつさうの御法の声ハ　ミゝにそひへてあさやかなり　都よりくたるもの　田舎よりのほるもの　此清見寺を見ぬものハなかりけり

かゝりける所に　くハんたうのしゆんれいとうち見えて　めんつうにたわらそはにおき　くはくらんをそやミにける　竹斎是を見るよりも　ミやうりのためとやおもひけん　くすりをこそハあたへけるあたりの人〳〵申けるハ　わつらひハなにそと　とひけれハ　ほつくをそいたしける

くはくらんを　するかのふしの山ゐ哉

にらミの助、やかてつけにけり

くすりかうしゆの　しろハあしから

【十一行】さて、南に立いてゝ　みほの松原うちなかめ　しほくむためか田子のうら　なミよりうへの、うき嶋を　見れはこゝろも、きよ見かせき　かゝるうき身ハ、よもとかめしとて、こしをれそ、つらねける

はる〳〵と　こゝにきよ見かせきもりも

かゝるうき身は　さしもとゝめし

にらミの助も、一首申さんとて

しうとのと　われにつきそふひんほかミ
こゝにきよミかせきをゆるすな
かくて、せいけんしに参りつゝ、御堂のあたりを、ミわたせは、前には、かいすいまん〳〵として　へんしうに、さほをさし、つりのいとなミ、ひまもなし　後にハ、れいけん山たかふして、はん木こすゑをならへ、たにの水をと、入あひのかねに至るまて　まことに、しよほうしつそうの御法のこゑは、耳にそひえて　あさやか也、都よりくたる者　ゐなかよりのほる者　此せいけんしをミぬ者ハ、なかりける所に　くわんとうの順礼とうち見えて　めんつうにたわら、そはにおき　くわくらんをこそやミにける　竹斎これを見るよりも　あたりの人ゝ申けるは、わつらひハ何そと、とひけれは、ほつくをそいたしける
くわくらんを　するかのふしのやまひかな
にらミの助、やかてつけにけり
くすりかうしゆのしろはあしから
【十行】扨、南に立出て、みほの松原打なかめ、しほくむためか、田子の浦、波より上の、うき嶋を、みれは心も、きよみかせき、かゝる浮身ハ、よもとかめしとて、こしをれそ、つらねける
はる〳〵とこゝにきよみかせきもりも
かゝるうき身は　さしもとゝめし
にらミのすけも、一しゆ申さんとて
しうとのと　我につきそふひんほかミ
こゝにきよミかせきをゆるすな
かくて、せいけんしに参りつゝ、御堂のあたりを、見渡せは、前には、海水まん〳〵として、へんしうに、さほさし、つりのいとなミ、ひまもなし、うしろにはハ、れいけん山たかふして、はんほくこすゑをならへ、谷の水音、入相のかねに至るまて、誠に、しよほうしつそうのミのりの声は、みゝにそひえてあさやか也、都よりくたる者、ゐなかよりのほる者、此せいけん寺をミぬ者は、なかりける所に、くハんとうのしゆんれいと打見えて、めんつう荷たわら、そはに置、くわくらんをこそ、やミにける
ちくさいこれを見るよりも、あたりの人ゝ申けるは、わつらひなにそと、とひけれは、ほつ句をそいたしける
くわくらんを　するかのふしの山ゐかな
にらミのすけ、やかてつけにけり
くすりかうしゆの　しろはあしから
【整版本】みなミに立出て、ミほの松バら、うちながめ、しほくむためか、たごのうら。なミよりうへの、うきしまハ。なミのあハれに、すむ月の。かげハさやかに、きよ見かた。かゝるうき身ハ、よもとがめじとて。こしをれを、つらねり
はる〳〵と　こゝにきよミがせきもりも
かゝるうき身ハさしてとゞめし
にらミのすけも、一しゆ
しうどのとわれにつきそふびんぼかミ

こゝにきよミがせきにとゞまれ

せいけんじに参りて。みだうのあたりを、なかむれバ。まへにハ、かいすいまん〳〵として。をふねにさほをさし。つりのいとなミ、ひまもなし。うしろにハ、れいげんの山たかふして。ばんほく、こずゑをならべ。たにの水をと、いりあひのかねに、いたるまで。まことに、しよほうじつさうのミのりのこゑハ。みゝにそびえて、きこゆなり、都よりのおりくだり。いなかよりのわうくハんのりよじん、かのせいけんに立より。おかまぬ人ハなかりけり、かゝりけるところに。くハんとうのしゆんれいと打みえて。わりこにたハら、そばにをき。せんごもしらず、わつらひけり。竹さい、これをみるよりも。ミやうりのためと思ひつゝ。くすりをすこし、あたへけり。あたりの人ゝこれをミて。わつらひなにぞと、とひけれバ。ほつくをぞ、いたしける

くわくらんを　するかのふしのやまひかな

にらミのすけ、やかてつけにけり

くすりかうじゆのしろハあしがら

【推定文】さて、南に立出て、三保の松原うちなかめ、しほ汲ためか田子のうら。なみよりうへのうきしまを、見れは心もきよ見かせき、懸るうき身はよもとかめしとて、こしおれそつらねけり。

はるはると　こゝにきよ見かせき守も

かゝうき身は　さしてとかめし

にらみの助も一首申さんとて

しうとのと　我につきそふひんほう神

こゝにきよみかせきを　ゆるすな

かくてせいけんしに参りつゝ。みたうのあたりをみわたせは。前にはかいすいまんまんとして、へんしうにさほをさし、つりのいとなみひまもなし。後にはれいけんの山たかふして、はんほくこすへをならへ、たにの水音、入あひのかねに至る迄、誠にしよほうしつさうの御法の声は、耳にそひへてあさやかなり。都よりくたるもの、ゐなかよりのほる者、此せいけんしをみぬ者は、なかりけり。懸りけるける所に、くはんたうのしゆんれいとうち見えて、めんつうにたわらそはにおき、くはくらんをそやみにける。竹斎是を見るよりも、みやうりのためとやおもひけん。くすりをこそはあたへける。あたりの人々申しけるは、わつらひはなにそとひけれは、ほつくをそいたしける。

くはくらんをするかのふしの山ゐ哉

にらみの助、やかてつけにけり

くすりかうしゆの　しろはあしから

【現代語訳】さて、南に向かって立つと、景勝の三保の松原が眺められ、塩作りの為の塩汲みも目に映る名高い田子の浦、波間に浮んで見える浮島を、眺めているうちに、心も自ずと清められ、身も清見が関(関所)で、まさか此の身を咎めはしないだろうと、一首、

はるはると　ここにきよ見かせき守も　かゝるうき身はさしてとかめし(京よりはるばる漸く辿りついた旅人に、関守(関所の役人)よ、

まさか此憂き身を咎めなどせまい）

にらミの助も一首

しうとのと我につきそふひんほう神　ここにきよみかせきをゆるすな（主人様と私につきまとう貧乏神を、関守よ、どうか此処に引き止めて下され）

こんな具合にして、主従揃って清見寺を御参りし、御堂の辺りを見渡すと、前方では海水が満々と波打ち、漁師が小船に竿を操って、釣りの作業に勤しんでおり、後方は、霊験の山が高く聳え、多くの木々が茂り、谷の水音、寺院の暮れの鐘に至る迄、諸法実相を語る御法の御声は、耳に尊く聞えて有難さ一入。都より下り、田舎より上るもの、この清見寺をお参りせぬ者等居りません。そんな折に、関東地方からの順礼と思われる人がやって来て、弁当箱に、その入れ物の俵を傍に置いて、霍乱（急性腸カタル）を患っている様子。竹斎はこれを見るや、早速医者の務めとばかり、薬を施しました。周りの人が、何の病気ですか、と尋ねたので、発句で答えました。

くはくらんを　するかのふしの山ゐ哉（それにしても富士山を前にして、不時―思いがけぬ時に、病―霍乱―を患ったものですな）

すぐ様にらみの助が、付句を詠みます。

くすりかうしゆのしろはあしから（勿論、霍乱の薬、香じゅの代金は、足柄。お足―銭は、柄―空、つまり薬代は無料ですね）

108【写本】かくて　みたうを下向して　たひのならひのつれ〳〵に　とはすかたりをゆいの宿　かんはら過てゆく程に　藤川にはやくつきにけり　おりふし　水のみかさはあさけれとも　ふねにて渡る人もあり　又川しもをひきさかり　すこしあさみの有けれは　此竹斎も　かちにてわたらはやとおもひつゝ　少有けるぬのこをは　ふるしふかみにつゝみつゝ　竹斎もにらみの助も　うしろにおひなから　川のあさせを渡りしか　一首のこしおれをつらねけり

はななかす　藤川水のあさせには

匂ひてわたる人も有けり

扨　よし原にきて見れは　ゆくさきひろきはらの宿　里人申けるやうは　むかしは　此原の宿を　ふしはらの宿と申たると云けれはにらみの助一首申けり

藤原の　あしにまとへとむりやりに

うたかとをるそ　ていかそこのけ

【十二行】かくて御たうをけかうして、たひのならひのつれ〳〵に、とハす語りを、ゆひのしゆく、かん原すきて、ゆくほとに、ふし河に、はやくつきにけり、折節、水のみかさハあさけれ共、船にて渡る人もあり、川しもをひきさかり、すこしあさミの有けれハ、此竹斎も、かちにてわたらはやと思ひつゝ、すこし、有けるぬのこをは、ふるしふかミにつゝみつゝ、竹斎も、にらみのすけも、うしろにおひなから、川のあさせを渡りしか、一首のこしおれをつらねけり

はななかす　ふしかはミつのあさせには

匂ひてわたる　ひともありけり

扨、よしハらに、きて見れは、行さきひろき、ハらの宿、里人申け

るやうは、此はらのしゆくを、藤はらの宿と申たりと云けれは、にらミの介、一首申けり

ふちはらは　あしにまとへるむりやりに
うたかとをるそ　ていかそこのけ

【十行】かくて、御堂を下向して、旅のならひのつれ〳〵に、とハすかたりを、ゆひのしゆく、かんハら過きて、行程に、ふし川に、はやく着にけり、折節、水のみかさハ浅けれ共、舟にて渡る人も有、川下を引さかり、少、あさミの有けれは、此ちくさいも、かちにて渡らはやと思ひつゝ、少有けるぬのこをは、ふるしふかミにつゝみつゝ、ちくさいも、にらミの助も、うしろにおひなから、川の浅せを渡りしか、一首のこしおれを、つらねけり

花なかす　ふし河水のあさせには
にほひてわたる　人もありけり

扨、よしハらに、きてみれは、行さきひろき、原のしゆく、里人申しけるやうは、此はらのしゆくを、ふち原のしゆくと申たるといひけれは、

ふちはらは　あしにまとへるむりやりに
うたかとをるそ　ていかそこのけ

【整版本】かくて、ミだうをげかうして。たびのならひのつれ〳〵に。とハずがたりをゆいのしゆく。かんバら過て、行程に、ふじ川につきにけり。折ふし、水のミかさのあさけれバ、みな〳〵かちにて、わたりけり。ちくさいも、にらミのすけも。せ中に、にたハらおひなから。かちにて、ふし川わたりけるが。うしろより、にらミのすけ、一しゆかくぞ聞えける

ふじかハの　なミにも花やうかふらん
にほいてわたる　人もありけり

さて、よしハらに、きてミれハ。行さきひろき、原の宿、里人申けるやうハ。むかしハ、ふしきや、此さとを。ふちハらと　申せしか、いつの世よりか引かへて、よしハらと、なつけゝり、にらミのすけハ、きくよりも

ふちハらハ　あしにかゝれとむりやりに
うたがとをるぞ　ていかそこのけ

【推定文】かくてみたうを下向して、たひのならひのつれつれに、とはすかたりをゆひの宿。かん原すきて、ゆくほとに、藤川にはやくつきにけり。おりふし水のみかさはあさけれとも、ふねにて渡る人も有り、又川しもをひきさかり、すこしあさみの有けれは、此竹斎もかちにてわたらはやとおもひつつ、少有けるぬのこをは、ふるしふかみにつつみつつ、竹斎もにらみの助も、うしろにおひなから、川のあさせを渡りしか、一首のこしおれをつらねけり

はななかす　藤川水のあさせには
匂ひてわたる人も有けり

扨よし原にきてみれは、ゆくさきひろきはらの宿、里人申けるやうは、むかしは此原の宿を、ふしはらの宿と申たると云けれは、にらみの助一首申けり

藤原の　あしにまとへとむりやりに
　うたかとをるそ　ていかそこのけ

【現代語訳】この様にして、清見寺の御堂を下向して、旅には付き物の、退屈紛れに、尋ねられもせぬのに人に話掛ける由井（言う）の宿に着き、次の宿場の蒲原を通り過ぎて行く程に、はや藤川（富士川）を前にしています。折節水量水嵩（みかさ）は浅かったが、舟で渡る人も有り、又川下に行くと、少し浅い所も有り、竹斎も歩いて渡りたいと思いながら、少しばかり有る布子を、古渋紙に包みつつ、竹斎もにらみの助も、共に荷を背負いながら、一首の腰折れを連ねました。

花なかす　ふし川水のあさせには
　匂ひてわたる人もありけり（藤の花びらを流す富士川の水の浅瀬には、荷を負い、藤の花の香りをかいて渡る人いるのですよ）

さて吉原の宿に着いてみると、その行く末は更に先の原の宿で、里人が言うには、この原の宿は、ふしわらの宿と申していたと言う、のを聞き、早速にらみの助が一首申しました。

藤原の　あしにまとへとむりやりに　うたかとおるそ　ていかそこのけ（藤原の宿の藤のつるは、足に絡み付いてくる、我はにらみの助、歌が通るぞ、定家よ其処をおどきなさい）

109【写本】なをゆくさきは野をわけて　なひきあひたるなつくさの
　あやめもしけるぬまつとかや　また夜をこめて此里を　いつのみしまに着にけり　つたへ聞　此明神は　ほんしたいつうちしやうふつなり　むかしのうゐんか　苗代水とよみける歌を　なうしうまします　承れは　有かたくこそは覚えける　するはさかしきあしから山　木末にくらきしのゝめの　色もみとりやそめぬらん　うかめるとりのかけ見れは　心のまゝに飛あそふ
　かうなんのやすい　てんよりもみとりなり　中にはくわうあり我かんに似り
とつくられしも　かくやとおもひしられたり　やう〳〵ゆもとに出ぬれは　わかこしかたはそのあとを　うちかへし見るおたわらやきく川の宿に着けれハは　一首のうたをつゝりけり
　命のふる　薬はなをもきく川の
　おいその人や　わかくなるらん
　扨ひらつかをうち過て　花にやとかる藤さハや　とつかの宿を立出て　ほとかいにはやく着にけれは　なつ来にけりとかたひらのかたハ色〳〵品川や　わたれハこゝそむさしあふミ　かけておもひし糸桜　はなのお江戸に着にけれハ　こしおれを一首つゝりけり
　むらさきの　ゆかりなけれハむさしのや
　はてしもあらぬ我おもひ哉

【十一行】なほ、ゆく道八、野をわけて　なひきあひたる夏草のあやめもしける　ぬますとかや　また夜をこめて　此里を　いづのみしまに　つきにけり　つたへきく　此明神は　ほんち　たいつうちしやう仏なり　昔のうゐんか　なわしろ水と読ける歌を　なうしうまし〳〵けると承ハれは　ありかたくこそは覚えける　末ハさか

しき　あしから山　こすえにくらき、しのゝめの　空も明ゆく箱ね山　上り〳〵て　いけ水の　色もみとりや　そめぬらん　うかめる鳥の　かけみれは　心のまゝに　とひあそふ　かうなんのやすい　てんよりもミとりなり　中にはくわう有　かんにこたりと　作られしも　かくやと思ひしられたり　やう〳〵ゆもとに出ぬれは　我こしかたの　其あとを　打かへし見る　小田原や　きく川の宿につきけれは　一首の歌をつゝりけり

いのちのふ　くすりはなをもきくかわの
　おいうのひとや　わかくなるらん

扨　平つかをうちすきて、花にやとかる。ふちさわや、とつかのしゆくを立出て、ほとかいに　はやくつきけれは　夏きにけりと　かたひらの　かたハ色々　しな川や　渡れはこゝそ　武蔵あふミ、かけて思ひし　糸櫻　花のお江戸に　つきけれは　こしをれ一首

むらさきの　ゆかりなけれは　むさし野や
　はてしもあらぬ　わかおもひくさ

【十行】猶行道ハ、野をわけて、なひきあひたる夏草の、あやめもしける、ぬますとかや、また夜をこめて、此里を、いづの三島に、つきにけり、つたへ聞、此明神は、ほんち、たいつうきしようふつ也、昔のういんか、なはしろ水とよミける歌を、なうしうまし〳〵けるとうけたまハれは、有かたくこそは覚えける、すゑハさかしき、あしから山、木末にくらき、しのゝ目の、空も明行はこね山、のほり〳〵て、池水の、色もみとりや、そめぬらん、うかめる鳥の、かけみれは、心のまゝに、とひあそふ　かうなんのやすい、てんよりもミとり也、中にはくわうあり、かんに似たりと、作られしも、かくやと思ひしられたり　やう〳〵、ゆもとに出ぬれは、我こしかたの、其跡を、うち返し見る、小田原や、きく河のしゆくに着けれは、一しゆのうたをつゝりけり

いのちのふ　くすりはなをもきく川の
　おいその人や　わかくなるらん

扨、ひらつかを打過て、花に宿かる、ふちさわや、とつかのしゆくを立出て、ほとかいに、はやくつきけれは、夏はきにけり、かたひらの、かたハ色〳〵、しな川や、渡れはこゝそ、武蔵あふミ、かけて思ひし、いと櫻、花のお江戸に、つきけれは、こしおれ一首つゝくりけり

むらさきの　ゆかりなけれは武蔵野や
　はてしもあらぬ　わかおもひ草

【整版本】なを行ミちハ、野をわけて。なびきあひたる夏草の。あやめもしげる、ぬまづとかや。まだ夜をこめて、此里を。いつのミしまに、つきにけり。つたへきく、此明神ハ、ほんぢ、大つうちせう仏。そのいにしへ、のうゐんが。なハしろ水とよミける歌。まことに、神もなうじうましますと、うけたまハれハ、わたくしも。ほつくを一つ、いたさんとて。しハし、ぎんじて有ければ、にらミのすけも、一しゆつかまつらんとて、まづ

我ハ世に　いづのミしまの宮井かな

竹さいつけにけり

にらミ

神もうけひけ　なハたかき山　　竹

さて行すゑハ、とをきミち。ひるさへたどる、あしがら山、こすゑもくらきしのゝめの。そらもやう〳〵、明て見る。はこねの山につきしかハ。のぼり〳〵て、いけ水の。有かたハらに、やすらひて、ミれハ、うかへるとりとりハ。かもめ、にほとり。かひつぶり。そのとも〳〵と、あそびけり。そのかけをミれハ、風ハふかねど、なミのもん、いろ〳〵に、みとりなり、かうなんのやすい、天よりもみとり也と、つくられしも、かくやと思ひしられたり。やうやく、ゆもとに出ぬれば。わがこしかたの、其あとを。うち返しみる、をた原や。きく川のしゆくに、つきけれは。一しゆハかうぞ、ゑひしける

いのちのぶる　くすりハなをもきくかはの

おひそのひとや　わかくなるらん

さて、ひらつかをうち過て。花に宿かる、ふぢさハや、とつかのしゆくを立ぬれは、ほどがひに、はやくつきにけり。夏きにけりと、かたびらを。そめてハすゝぐ、かの川の、かたハいろ〳〵しな川や。わたれハこゝそむさしあぶミ。かけて思ひし、いとざくら。花のおゑどに、つきにけり。くたるあづまの、はてしなく。かなしき事や、われば かり、たれをたよりに、すミなさんと、おもひおもひて、一しゆは、かくそつらねけり

むらさきの　ゆかりもなしや　むさし野の

くさばのかげと　よるやどもなし

【推定文】なをゆくみちは野をわけて、なひきあひたるなつくさの、あやめもしけるぬまつとかや。また夜をこめて此里を、いつのみしまに着にけり。つたへ聞、此明神は、ほんしたいつうちしやうふつなり。むかしのうゐんか、苗代水とよみける歌を、なうしうましますと承れは、有かたくこそは覚えける。すゑはさかしきあしから山、木末にくらきしののめの、空も明ゆく箱ね山、上り上りていけ水の、色もみとりやそめぬらん。うかめるとりのかけ見れは、心のままに飛あそふ。かうなんのやすい、てんよりもみとりなり。中にはくわうあり。我かんに似りとつくられしも、かくやとおもひしられたり。やうやうゆもとに出ぬれは、わかこしかたはそのあとを、うちかへし見るおたわらや。きく川の宿に着けれは、一首のうたをつつりけり。

命のふる　薬はなをもきく川の

おいその人や　わかくなるらん

さて、ひらつかをうち過て、花にやとかる藤さはや。とつかの宿を立出て、ほとかいにはやく着にけれは、なつ来にけりとかたひらの、かたは色々品川や。わたれはここそむさしあふみ。かけておもひし糸桜。はなのお江戸に着にけれは、こしおれを一首つつりけり。

むらさきの　ゆかりなけれは　むさしのや

はてしもあらぬ我おもひ哉

【現代語訳】尚これから行く道は、生え茂る野に分け入りて、風に靡くにまかせた夏草の、あやめも茂る沼津とか言う宿、まだ夜が明けない内にこの里を、伊豆（出る）の三島に到着しました。伝え聞く所によると、ここの三島明神は、本地大通智勝仏（ほんじだいつうちしやうぶつ）で昔能因法師が苗代水と詠んだ歌（天の河苗代水にせきくだせ　天くだります神ならば神）を、聞き入れて下さったと伺っておりますので、有難く存じております。さてこの先は、険しい足柄山、梢が茂り暗いが、明け方になり、空も明るくなり始めた箱根山。登り登って芦ノ湖の、水の色も緑に染まっている様です。水に浮んでいる鳥たちの姿を見ると心のままに飛び遊んでいる様子、「江南野水碧於天中有白鷗間似我」と詩に詠まれたのもこの様な風景を詠んだものでしょう。漸くゆもとに至り、我らが来た跡を繰り返し見る小田原の宿。そして菊川の宿に着いたので、一首の歌を作りました。

命のふる　薬はなをもきく川の　おいその人やわかくなるらん（延命に効くくすりによって、老いそ（大磯）の老人も若くなるでしょう）

さて、平塚の宿を過ぎて、花に又宿を借りるという草、藤（藤の花）沢の宿を過ぎ、戸塚の宿も立ち、早くも保土ヶ谷に到着。夏が来たぞと、涼し気な一重の帷子（かたびら）を染めて、染めの形は色々種類が有る品（品々）川を、渡ればここぞ武蔵鐙（武蔵の国の特産）、愈々武蔵の国に到着、鐙に足を懸けて、思うは、見事な枝垂れ櫻。花のお江戸に着いたぞと、一首読みあげます。

むらさきの　ゆかりなければむさしのや　はてしもあらぬ我がおもひ哉（紫草の武蔵野に、知る人が一人もおりませんので、限りなく心細く思えてなりません）

⑩【写本】かやうにこしおれをうちつらね　をとに聞えし日本はし

ととろ〳〵とうちわたり　こゝハいつくそかんたのたい　みなミにあたりてなかむれハ　てんかのあるしおはします　かさねあけたるしやうくはくハ　空につらなるはかりなり　てん人のふかくの声　さなからいきやうくんしつゝ　花ふりくたる櫻田より　いらかをならふる家つくり　あめかしたなる　しよたいミやう　日夜朝暮の出仕の有様　君をしゆこし奉る　誠にゆゝしくも見えにけり　おなしくるわの山つつき　木きハ木末をならへつゝ　前に小松をうへそへて　しけるあひたの其中に　との作りしておはします　わか君様と聞えける　はゝかりなから一首よろこひの歌を詠しけり

みとりたつ　松にわかはのしけりそひて
千代をかさぬるためしなるらん

ひかしをはるかに見わたせは　さうかいなミしつかにして　ミつきをはこふとかいのふね　世わたりぬるいとわさの舟ハ　みなとに限りなし　へんはんそらにかゝって　あきまんふく　れいけつたん〳〵として　水になミなし　とつくりしもかくやとおもひしられたり　北にあたつて朝草や　角田川原にもちかかりけり　にしハたやすのはてしなく　ひかしハうみをかきりにて　さい家の数ハかすしらす　あさけゆふけのけふり立　たミのかまともにきわひて　舟路のみつきかちちのミつき　はこふあゆミのひまもなく　とひをんこ

くの旅人や　きせん上下の人　この袖をつらねてゆく水の　にこりなき世のしるしとかや

【十一行】かやうに、こしおれを、うちつらね、おとに聞えし日本はし、とゝろ〳〵とうち渡り　こゝは、いつくそかんたのたい、南にあたりて、なかむれは、天下のあるし、おはします、かさねあけたる、しやうくわくは、くもにつらなる、はかりなり　てんにんの、ふかくのこゑ。さなから、いきやうくんしつゝ、花ふりくたる、さくらたより、いらかをならふる、家作り、あめかしたなる、しよ大ミやう、日夜てうほの、しゆつしのありさま、君をしゆこし奉り、けにゆゝしくも見えにけり、おなしくるまの山つゝき、木ゝはこすゑをならへつゝ、松にこまつを、うへそへて、しけるあいたの、その中に、とのつくりして、おはします、若君さまと聞えける、はゝかりなからも、一しゆ、よろこひのうたをゑいしける

みとりたつ　松にわかはのしけりそひ
ちよをかさぬる　ためしなるらん

東を、はるかに見わたせは、そうかいなミしつかにして、みつきをはこふ、とかいのふね、世をわたりぬる、いとわさの、船はミなとに、かきりなし、へんはんそらにかゝつて、あきまんふく、れいけつたん〳〵として、水になミなしと、つくりしも、かくやと思ひしられたり　きたにあたりて、あさくさや、すミたかハらも、ちかかりけり、にしハたやすの、はてしなく、ひかしハうミを、かきりにて、さいけの数ハ、しらす、あさけゆうけの、けふりたち、たミのかまとも、にきわひて、船路のミつき、かち路のミつき、はこふあゆミの、ひまもなく、とひおんこくの、たひ人や、きせん上下の、人ゝの、袖をつらねて、ゆく水の、にこりなきよの、しるしとかや、

【十行】加様に、こしおれを、打つらね、をとにきこえしかんたのたい、南にあたりて、なかむれは、天下のあるし、おはします、重あけたる、しやうくわくは、雲につらなる、はか也、天人の、ふかくの声、さなから、いきやうくんしつゝ、花ふりくたる、櫻田より、いらかをならふる、家つくり、あめかしたなる、諸大名、日夜朝暮の、出仕の有様、君をしゆこし奉り、けにゆゝしくも見えにけり、おなしくるわの山つゝき、木々は木末をならへつゝ、松にこまつを、うへ添て、しける間の、其中に、殿作りして、おはします、若君様と聞えける、はゝかりなからも、一首、よろこひの歌を、ゑいしける

みとりたつ　松にわかはのしけりそひ
ちよをかさぬる　ためしなるらん

東を、はるかに見渡せは、そうかい、波静かにして、みつきをはこふ、とかいの船、世を渡りぬる、いとわさの、船ハミなとに、限なし、「へんはん空にかゝつて、あきまんふく、けつたん〳〵として、水に波なし」と、つくりしも、かくやと思うひしられたり

北にあたりて、あさくさや、すミ田河原も、近かりけり、西ハたやすの、はてしなく、東は海を、かきりにて。在家の数ハ、かすしらす、あさけゆふけの、けふり立、たミのかまとも、にきわひて、

ふなちのミつき、かち路のみつき、はこふあゆミの、ひまもなく、とい遠国の、旅人や、きせん上下の、人この、袖をつらねて、ゆく水の、にこりなきよの、しるしとかや

【整版本】かやうにゑいじて、しばくちをすき行バ、ひだりにあたりて、大寺あり。たよりに、おかミ申けれバ。三もんに、三ゑんざんと、がくをうたれけり、ぢごハざうじやうしと、申けり。さて〳〵、むさしにくだりて、きつけうのよき御てらをおかミ申也、この御てらのさんがう、寺ごうハ、かたしけなくも、ぜんたう大しの、しんゑん、ごんゑん、そうじやうゑんの、こゝろなるべし。竹さいも、江戸にて、かねをまふけなば、家をもち、女をむかへ。ミつのゑんをむすび。しんだいをも、をしなをし、人こしくもなりたゝむと。こゝろのうちに、よろこひけり

さて、それよりも過行ハ。をとに聞えし、日のもとの。はしをみな人わたりかね。世をもたゝずミかねたりし。事のためしも、おほかりし。こゝハいづくぞ、かんだのだい、みなミにあたりて、ながむれは、天下のぶしやうの御ざなさる、御しろの見事さよ。金銀るりの玉ぎをはり、かさねあけたる、らうかくハ。雲につらなる有さまハ。もろこししんのしくわうてい。かんやうきうにも、おとるまじ。てんにんのやうがうも、日夜てうぼ、ありぬやと。いきやうくんして、花もふり。さきちる程が、櫻田より。いらかをならぶる家づくり。天下にのこらぬ、しよ大名。じゞこつこくの、しゆつしのてい。君をしゆごしたてまつる、げにゆゝしくぞ、見えにけり。おなし、おしろの山つゝき。松にこまつをうへそへて。しける間のその中に。とのつくりして、おはします、わかきミさまと聞えける。はゞからす、また一しゆ

みとり立　まつにこまつをうへそへて
　　千代をかさぬる　ためしなるらん

ひがしを、はるかに、ミわたせハ。さうかい、なミしつかにして、みきハのふねハ、かきりなし。「へんしう空にかゝつて、あきまんふく、れいけつたん〳〵として、水になミなし」と、つくられしも。かくやと、おもひしられたり。きたにあたりて、あさ草や。すみた河原も、ちかかりけり。にしハたやすの、はてしなく。ひかしハうミを、かきりにて。さいけの数ハ、かきりなし。あさな夕なに、立けふり。たミのかまどハ、にぎハひて。ふなちのミつき、くがともに。はこぶあゆミハ、ひまもなく。とひをん国の、たび人や。きせん上下の、人くの、袖をつらねて、ゆく水の。にこりなき世の、しるしとかや。

【推定文】かやうに、こしおれをうちつらね、をとに聞えし日本はしととろととろとうちわたり、ここはいつくそかんたのたい、みなみにあたりてなかむれは、てんかのあるしおはします。かさねあけたるしやうかくは、雲につらなるはかりなり。てん人のふかくの声、さなからいきやうくんしつつ、花ふりくたる桜田より、いらかをならふる家つくり、あめかしたなるしよたいみやう、日夜朝暮の出仕の有様。君をしゆこし奉る、誠にゆゆしくも見えにけり。おなしく

るわの山つつき、木きは木末をならへつ、松に小松をうへそへて、しけるあいたの其中に、との作りしておはします、わか君さまと聞えける、ははかりなからも、一首よろこひの歌を詠しけり。

みとりたつ　松にわかはのしけりそひて
　　千代をかさぬる　ためしなるらん

ひかしをはるかに、見わたせは、さうかいなみしつかにして、みつきをはこふとかいのふね、世わたりぬるいとわさの、舟はみなとに限りなし、へんはんそらにかかつて、あきまんふく、れいけつたんたんとして、水になみなし、とつくりしも、かくやとおもひしられたり。北にあたつて、朝草や角田川原にもちかかりけり。にしはたやすのはてしなく、ひかしはうみをかきりにて、さい家の数は、かすしらす、あさけゆふけのけふり立、たみのかまともにきわひて、舟路のみつき、かちちのみつき、はこふあゆみのひまもなく、とひをんこくの旅人や、きせん上下の人、この袖をつらねてゆく水の、にこりなきよのしるしとかや。

【現代語訳】この様な腰折れ歌を詠みつらね、名高い日本橋を、勇み立って渡りつつ、ここは何処（いずこ）と言えば神田の台、南に向かって眺めますと、天下の主が居られます。幾重にも重った江戸城の城郭は、正に雲に連なるばかりです。天人の影向で舞楽の声、此の上ない香りを薫じつつ、爛漫たる桜田、そして甍を並べた家作り、天下の諸大名が、日夜朝暮れに、出仕の有様。主君を守護なさって居られる様は誠に立派に見えます。同じ城郭の連なり、周囲の木々は梢を並べ、松に小松を回りに植え添え、繁茂したその中に、御殿をお作りになっています。その主は若君と鳴り響いているお方で（竹千代―家光）、畏れ多くも一首、慶びの歌を詠ませて戴きます。

みどりたつ　松にわかはのしけりそひて　千代をかさぬる　ためしなるらん（初々しい緑が茂り、雄雄しい松（秀忠）に若葉（竹千代）が茂り添えて、千代を重ねる前例になることでしょう）

東を遥かに見渡すと、青々とした大海が波しずかにして、貢ぎ物を運ぶ渡海の船、世を渡る為の営みの、船は港に限りなく続きます。「片帆空に懸って秋満腹　れい月淡々として水に波なし」と詠われたのもこの様な事と思い知らされます。北の方角を眺めると、浅草や、隅田川原も近くと思われます。西は田安御門に果てしなく続き、東は、海に達し、民家は数知らず。朝餉夕餉の支度の煙が立ち、民の竈（かまど）も活気盛んで、船の貢ぎ、陸地の貢ぎ、運ぶ歩みの暇も無い程で、都会、田舎からの旅人や、貴賤上下の人々が、皆袖を連ねて、水の流れの様に自然であり、正に濁り無き世の証明では有るまいか。以上

※『竹斎』本文は、今回で終了の予定でしたが、時間に追われ、やむを得ず次回に終了させていただきます。

令和五年十月十九日